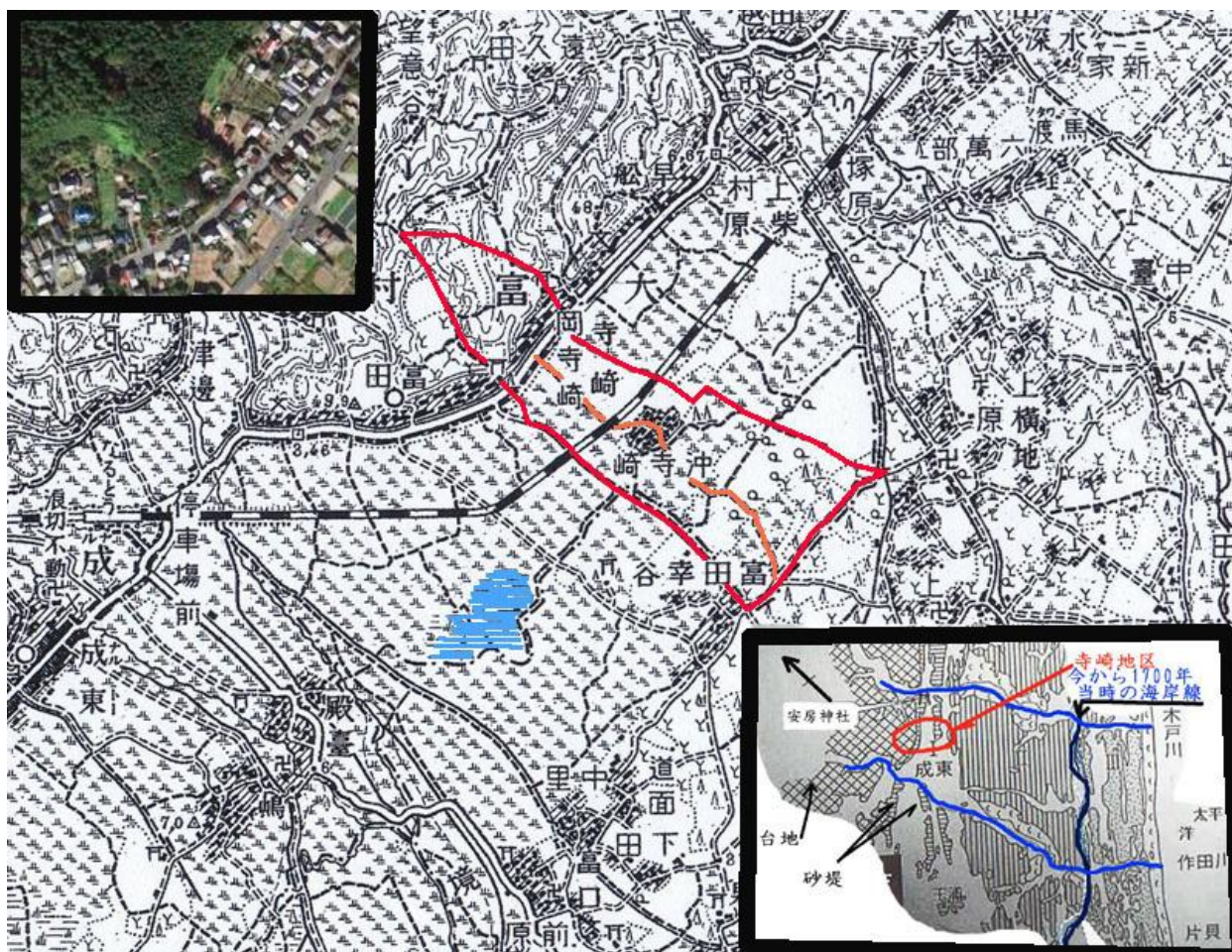


寺崎風土記

寺崎の起こり



今から約1700年ぐらい前、現在、田圃がある所は作田川によって海につながっている湖（ラグーン）だった（右下挿入図（千葉県其自然誌に掲載）参照）。その名残が古地図に残っている「富田沼」や寺崎の小字の「富家田（深い田）」である。一方、沖寺崎の辺りは湖（ラグーン）の中の島であった様子が右下図に現れている。

この右下図の状況から推し量れば、成東という地名が日本武尊が東征の際、この地方に立ち寄り、その際、不動様に打ち寄せる怒涛を見て“涛（波）が打ち寄せて鳴っている”と呟いたことから鳴涛→成東と呼ばれるようになったとの伝説は現実的なことであったかもしれない。

小字の「鶴舞」や「松島」や「富久島」あたりは右下図では砂堤だった。その為、満潮の時は、海からの水が作田川、富田沼をとおり、岡寺崎と沖寺崎の間の海峡を速い流れで押し寄せ、早船を経て松尾の水深の方へ流れていた。その流れに乗って日本武尊の軍船が渡ってきた時、日本武尊は「ここは舟が速く走る」といったことから、早船という地名になったとのことである。また、早尾神社のところで一旦上陸したので、早尾神社が出来たとのことである。そのようなところだったので、寺崎の祖先（4～5軒）は当初、常盤台に住んでいたとの古老の話から、多分、牛や馬の放牧で生活していたのであろう。

江戸時代になって新田開発が奨励され、治水対策が進められた事から寺崎の祖先は鶴などが舞っていた沖寺崎周辺に居を移し（だから、鶴舞という地名になった）、新田開発を行なって稲作を始めた。その時期は、最も古い位牌の年号が明暦となっていたので、江戸時代初頭の頃と推定することができる。

なお、寺崎という地名の由来は、寺崎地区の地形（左上挿入図参照）が、平らな台地が御崎（みさき）のよう

に突き出している台地の先端である（ひら（平）・さき（山の先端））ことからの転訛で、台地の端の土が崩れて地肌が表れている崖地、傾斜地、坂という意味で付けられたと思われる。

現在の寺崎は、昭和になってからの2度の土地改良（一度目は、昭和35年竣工で、小字の南耕地・北高地・深田部分だけを対象に最大一反部の長方形耕作地化として行われ、二度目は昭和61年竣工で、残りのJR総武線以南部分）によって近代的な圃場となっている。

しかし、古地図に見られるように、戦争直後の**農地解放**までは、田圃も畑もパッチワークの様な状況で農道もくなくにやと曲がりくねっていた。

また、沼（富田沼）があったり、荒地（松島や日の出地区には松が生えていた）があったりしており、田圃や蓮田にはドジョウやアメリカザリガニ等がたくさん生息していたり、用水路にはナマズや雷魚等も生息していた。